

プリンス・オブ・ソクラ大学看護学部との国際学生間交流における連携システムの構築と課題

著者	田村 眞由美, 白石 裕子, 藤井 加那子
雑誌名	南九州看護研究誌
巻	13
号	1
ページ	33-40
発行年	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/10458/5707

プリンス・オブ・ソクラ大学看護学部との国際学生間交流における 連携システムの構築と課題

Development of Cooperation System in for International Student Exchanges between Prince of Songkla University and The School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

田村真由美¹⁾・白石 裕子²⁾・藤井加那子³⁾

Mayumi Tamura・Yuko Shiraishi・Kanakano Fujii

キーワード：プリンス・オブ・ソクラ大学，国際学生間交流，連携システムの構築
Prince of Songkla University, international student exchanges,
development of cooperation system

はじめに

宮崎大学医学部看護学科は，2009年に締結されたタイ王国のPrince of Songkla University, Faculty of Nursing (以下PSU) と当大学の医学部の学部間協定のもと，学部生，大学院生および教員の交流を進めてきている。宮崎大学の掲げる「世界を視野に地域から始めよう」のスローガンのもと，国際連携センターを中心に全学で海外の大学との交流を図っている。2014年4月に医学部にも「国際交流室」が設置され，看護学科における国際交流の一翼として活動が開始された。

2010年度からは本学の看護学科4年生のPSUでの2週間の研修を総合実習の単位として認めている。これまでに25名の学生が実習を行い，また6名の大学院生が研修を行った。さらにPSUからの研修の受け入れも2014年度で6年目となり28名の学部生，大学院生を迎え，国際学生間交流は定着してきたといえるが，システムとしては十分であるとはいえない。

そこで，宮崎大学医学部看護学科とPSUとの国際学生間交流における本学内の連携システムを構築するために諸活動をまとめ課題について考察した。

PSUと本学との国際学生間交流

1. 本学・医学部の国際交流の目的

1) 宮崎大学の国際交流の目的

宮崎大学は，宮崎県内唯一の国立大学法人として，「世界を視野に地域から始めよう」のスローガンのもと，大学の基本的な目標において，変動する時代並びに多様な社会の要請に応え，人間性・社会性・国際性を備えた専門職業人を養成し，国際的に通用する研究活動を積極的に行い，その成果を大学の教育に反映させるとともに，地域をはじめ広く社会の発展に役立て，人類の福祉と繁栄に資する学際的な生命科学を創造するとともに，生命を育んできた地球環境の保全のための科学を志向することを掲げている。

1) 宮崎大学医学部看護学科 成人・老年看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki
2) 宮崎大学医学部看護学科 地域・精神看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki
3) 宮崎大学医学部看護学科 小児・母性看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

表1 宮崎大学医学部看護学科とPSU看護学部との交流の推移

本学から PSU へ								
	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計 (人)
学部学生	1	3	4	3	5	4	5	25
大学院生	0	0	1	1	0	2	2	6
教員	0	0	2	1	0	0	1	4
合計	1	3	7	5	5	6	8	35
PSU から本学へ								
	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計 (人)
学部学生	0	3	0	3	4	4	4	18
大学院生	0	2	0	2	2	2	2	10
教員	0	0	2	0	0	2	2	6
合計	0	5	2	5	6	8	8	34

この目標達成のために、国際性を培う教育の実施、地域から世界へ研究成果の発信、国際協力事業による国際社会への貢献を果たしていくことが必要であり、このように本学の国際連携活動の重要性に鑑み、以下に示す基本戦略とその基本戦略を確実に実行するための基盤整備事業からなる本学国際連携戦略を策定し、本学の国際交流・国際協力事業など国際連携活動をさらに計画的に推進していくとしている。

【基本戦略】

1. 国際的な学術交流を推進する
2. 国際的な学生交流を推進する
3. 国際協力事業を推進する
4. 宮崎県の国際化に向けた地域貢献を推進する

【基本戦略実現のための基盤整備事業】

1. 国際連携活動推進のための組織体制の整備を図る
2. 国際連携活動推進のための施設整備を図る
3. 国際連携活動推進のための国際広報の充実を図る
4. 国際連携活動推進のための危機管理体制の整備を図る

2) 宮崎大学医学部の国際交流の目的

宮崎大学医学部では、平成25年に宮崎大学清武キャンパス国際交流室を設置した。その目的として、「交流室は、外国の大学及び教育研究機関等との連携のもとに、国際学術研究・国際教育を推進し、本学部の特色ある国際交流事業の推進に資するとともに、学生及び研究者の受

け入れ・派遣、外国人留学生及び外国人研究者等に対する生活・就学上のサポートを行い、大学本部の国際連携センターと連携し、本学部の国際化に貢献することを目的とする。」ことを挙げている。

2014年度までの宮崎大学医学部看護学科とPSU看護学部との交流の推移を示した(表1)。

1. PSUにおける本学学生の総合実習

1) 看護学科における総合実習の位置づけ

看護学科では、PSUへの2週間の短期留学を総合実習の単位として2単位を付与している。看護学科の総合実習の学習目標は「すでに修得した基礎的看護能力を基に、より深めたい課題を展開できる場および対象を取り上げ、チームアプローチや総合的な看護実践能力の育成、看護実践上の問題の探求および解決能力を修得する。」である。

学習課題は以下の3つを挙げている。

1. 保健医療施設等におけるケア提供システムを理解する。
2. 今まで学んだ看護実践から看護を科学的、倫理的手法を用いてクリティカルシンキングし、自己の看護課題を明らかにする。
3. 看護の基本や管理の実際、チームのあり方、看護の将来的課題について学ぶ。

総合実習では、このような学習目標と課題に沿った、自己の課題を明確にして実習に臨むことになる。

2) PSU 総合実習における準備態勢

(1) English for Nursing purposes (ENP) の受講

ENPは、医学部の英語科の教員が看護学生に行う講義・演習であり、選択科目となっている。

ENP B

2年時に開講され、4単位が付与される。学習目標として、「4年次の総合実習における、プリンス・オブ・ソクラ大学留学を最終の目標として医療英語を中心に学び、個々が興味ある医療分野に応じて知識を深めるとともに、英語でのケアプラン作成や、看護コミュニケーションを学びます。」とあり、履修条件として「ソクラ大学留学を希望していること、自己学習を率先して出来ることが条件です。」とシラバスに掲載されている。PSUでの総合実習を受けるにはこの単位を履修することが必修条件となる。

ENP B

3年時に開講され、4単位が付与される。ENP Bを受講していることが履修条件であり、学習目標は、「4年次のプリンス・オブ・ソクラ大学留学に向けて、医療分野に関するディスカッションが活発に出来るようにする。2年次に学習した知識をもとに、個々が興味ある医療分野に応じてさらに知識を深めるとともに、英語でのケアプラン作成や、看護コミュニケーションを学ぶ。」である。

(2) ENP担当教員による学内選抜

上記のENP B及びENP Bを受講し、単位を取得した学生(以下、ENP学生)の中から、PSUの留学に適した学生をENP担当教員が4～5名推薦する。

(3) 留学日程の決定

看護学科の地域連携・国際交流委員会で適切な時期についての方向性を話し合い、学科会議に諮り決定する。その時期について医学部国際交流室にPSUでの受け入れ態勢の調整を依頼し最終決定を行い、教授会で承認を得る。

(4) Application formの作成と送付

PSU留学の3か月ほど前にApplication

formを作成し、PSUに送付する。Application formには、Personal Profile(個人のプロフィール)、Objectives(留学の目的)をA4用紙2枚程度で英語でまとめる。作成後、英語科教員の指導を受け、国際交流室の職員がPSUに送付する。

(5) 留学に関する財政的支援

現在、宮崎大学は、日本学生支援機構の短期派遣プログラムに採択されており、医学部学生支援課で希望者の家計調査、成績調査の後、本学に申請する。奨学金を受けることが承認されると、6～10万円の支援を受けることができる。PSUへの留学生については約7万円である。

(6) 総合実習担当教員の指導

PSUにApplication formを送付後、PSUから実習スケジュールが送付されて後、本看護学科における総合実習担当教員(看護学科の地域連携・国際交流委員会委員長)が総合実習の目的に沿った実習計画、目標設定の指導を行う。

また、渡航準備に際しての留意事項(PSUでの費用、必要物品、記録の送付方法等)の説明を行う。

(7) 総合実習中の連絡・指導

PSU滞在中は、清武国際交流室、学生支援課の担当職員が適宜連絡を取りサポートをしている。総合実習担当教員は、毎日メールで、送付された実習記録を読みコメントを書いてメール送信することで実習指導を行っている。

(8) 総合実習後の報告会の開催

PSUでの学びを報告するための「PSU総合実習報告会」を看護学科地域連携・国際交流委員会主催で開催している。ポスター掲示をして、

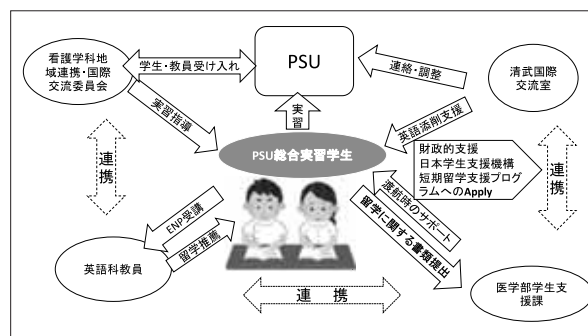


図1 PSUにおける総合実習支援システム

学生や教員の参加を募っている。

以上のようなPSUでの総合実習のための連携システムを図で示した(図1)。

2. 本学におけるPSU学生研修の受け入れ

1) PSU学生に関する本学の支援

(1) 研修プログラムの作成

PSUとの連絡は2014年度より新設された清武国際交流室が窓口となり、地域連携・国際交流委員会との連絡が行われた。PSU学生の具体的な研修希望内容に基づき、委員会で研修プログラムの作成を開始した。プログラムの作成にあたって、PSU学生が希望する研修内容を各領域に提示するとともに、研修対応の可否や提供可能なプログラムについて連絡いただき、研修プログラム作成を行った。2014年度より4年生の総合実習期間と研修期間が重複することとなり、実習指導と並行して研修対応を行うこととなるため、総合実習への影響が最小限となるよう、研修日程やプログラム参加人員の調整を行った。

研修プログラム作成は地域連携・国際交流委員会が中心となって原案を作成し、学生を受入れる領域と確認・調整の上でスケジュール表を作成した。研修スケジュールは看護学科教員ならびに清武国際交流室とで共有し、研修期間中のPSU学生の行動を把握できるようにした(表2)。

(2) 研修における支援

本学学生のPSUにおける総合実習の日程は、今年度から9月の夏季休業期間中となったため、PSUへ行く予定のENP学生がPSUからの学生の研修に同行することが可能となった。学生同士の交流が深まること、また研修におけるコミュニケーションサポートを期待し、PSU学生の研修に本学のENP学生が帯同することを試みた。

研修スケジュール決定後、ENP学生と地域連携・国際交流委員会で帯同するプログラム、帯同人数を検討・調整を行い、各学生の担当するプログラムを決定した。担当プログラム決定

表2 Schedule for Nursing Course Students from Prince of Songkla University

学生名	Miss A	Miss B	Miss C	Miss D	Miss E	Miss F	備考
学年(8月~)	N3	N3	N3	N4	M2	M2	
ニックネーム	P	B	M	A	W	A	
写真							
1st Week							
6/30(月)	宮崎到着(国際交流室1さん迎え、宿舎オリエンテーション)						国際交流室
7/1(火)	オリエンテーション、学科長挨拶、講演(地域連携・国際交流委員会委員長、宮崎大学医学部附属病院看護部)						国際交流室(1さん) ENP4年生全員
	施設案内>Welcome Party						
7/2(水)	9:00-子育て支援センター見学					医療情報部	ENP4年生2名
	13:30-16:00 女性のがん予防対策-ピンクリボン活動(JICA企画)					医療情報部	
7/3(木)	10:30-12:00 病棟実習(4東)						ENP4年生2名
	13:30-15:00 病棟実習(4東)	病棟実習(2南)		13:30-15:00 病棟実習(4東)	病棟実習(2南)	プレゼンテーション準備	
	17:00-18:00 院生・教員プレゼンテーション(参加)				17:00-18:00 院生・教員プレゼンテーション(発表)		
7/4(金)	病棟実習(4西)		10-12 NICU		病棟実習(4西)		ENP4年生3名
	13-14:30 NICU ホームホスピス宮崎カ ンファレンス参加		13:30-15:00 病棟実習(6東)		13-14:30 NICU ホームホスピス宮崎カ ンファレンス参加		
2nd Week							
7/5(土)	学生企画;ショッピング(イオンモールなど)、ホームパーティー						
7/6(日)	学生企画;観光(鶴戸神宮、青島)						
7/7(月)	市内精神病院のデイケアと地域生活支援センターの見学					救命救急センター	ENP4年生 2名 車 病棟実習(7東) 2名
7/8(火)	8:40-10:10 母性領域セミナー(3年生の授業)				レポートまとめ	レポートまとめ	ENP4年生全員
	10:30-12:00 看護生態学(3階実験室)						
7/9(水)	12:00-17:00 バス研修						ENP4年生2名
	病棟実習(1東)	8:00-15:00 病棟実習(3西)		病棟実習(1東)	病棟実習(2南)	病棟実習(1東)	
	病棟実習(2南)				病棟実習(2南)	講義	
17:00-18:00 Farewell Party						ENP4年生全員	
7/10(木)	帰国準備						ENP4年生2名
	宮崎出発						

後、学生は担当領域教員と研修に関する打合せを行い、必要に応じて担当領域教員と共同で受入準備作業を行った。

研修期間中はENP学生がPSU学生と共に行動したことで、スケジュールの急な変更などの連絡系の役割も担い、PSU学生への情報伝達がスムーズに行えた。また、学生が帯同できない場合においては清武国際交流室の職員に協力いただき、研修を実施することができた。

2) PSU学生とENP学生の学生間交流における連携

(1) 学生国際交流委員の設置

これまで、学生同士の交流事業はENP学生を中心とした学生有志によるボランティアを募り、行っていた。しかし、ENPを受講していない学生の国際交流に対する関心が少ないこと、講義・課外活動等のためにボランティアへの参加を見送るなど、一部の学生のみが交流をしているという現状があった。本学の教育目標には「国際的な視野をもち、社会に貢献できる人材を養う」ことが掲げられており、PSU学生受入は学生の国際的視野を育む良い機会であると考えられる。そのため、より多くの学生が国際交流に関心が持てるように、また主体的に交流活動を企画・遂行できる力を持つことを目指し、学生国際交流委員（以下、学生交流委員）を設置することとなった。

(2) 学生国際交流委員と地域連携・国際交流委員会の連携

学生交流委員は各学年から3名が選出されるが、ENP学生以外の学生が選出された学年もあった。委員選出後、速やかに学生委員と地域連携・国際交流委員で会議を持ち、学生委員設置の目的と期待される役割を共有した。PSU学生の研修は6月末に開始となることから、準備期間は約2ヶ月となった。委員は歓送迎会行事や観光、研修期間中の生活支援などの係に分かれて準備作業にとりかかった。また、次年度以降に委員が変更となった場合も、同学年内に係経験者がいることで、学生同士でサポートし合える体制となるよう、各係は多学年で構成す

るように努めた。

地域連携・国際交流委員会の教員はそれぞれが担当する係をもち、準備や運営の相談役としてサポートする体制をとった。学生委員の準備作業は担当教員が適宜進捗状況を確認し、アドバイスをを行った。また、地域連携・国際交流委員会で学生の準備状況を共有していった。

前年度までの学生ボランティアが培ってきたノウハウを残しつつ、学生国際交流委員が「主体的な組織」として成長していけるよう、学生が中心となって企画・運営を行うようにした。学生はスマートフォンアプリ「Line®」を用いて、係内の情報伝達・共有を行い、学生同士の連携を図っていた（図2）。

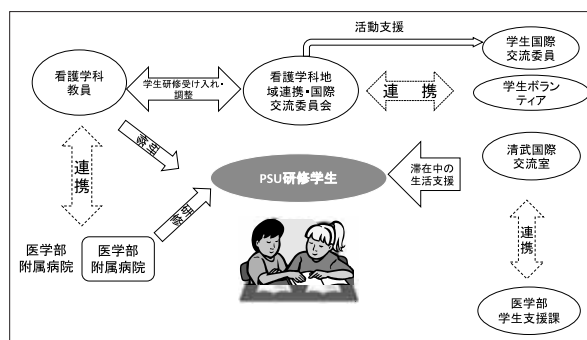


図2 PSU研修学生の研修支援システム

平成26年度の国際学生間交流の実際と評価

1. PSUにおける本学学生の総合実習の評価

国際交流室が実施した「海外留学アンケート」をもとに、本学学生がPSUで行った総合実習についての実際と評価を表に示す（表3）。

学生は一般の学生以上に英語をはじめ様々な勉強をしてきていると思われるが、PSUの実習を経験して、学習に対する姿勢が向上したといえ、実際に英語しか通用しない場に立ったことでの学びがあったと考える。またPSUでの総合実習は学生の進路についての考えにも影響を与えていた。

2. 本学で研修したPSU学生からの評価

PSUの学生が本学で行った研修については、国際交流室が実施した「Study Abroad Questionnaire」をもとにした評価を示す（表4）。

研修全般についての感想では、「機会があれば

表3 PSUでの本学学生の総合実習における学びと評価項目学びと評価

項目	学びと評価
滞在場所の環境, 施設	<ul style="list-style-type: none"> ・PSUでの宿舎は, 大学敷地内にある看護学生の寮であった ・シャワーが水であることやインターネット環境が不十分である
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・実習の記録やリフレクションの準備などで大変だった ・日々の実習で学ぶことはとても多かった ・毎日多くの知識・体験が増えていきとても楽しい実習だった ・現地の教員に説明してもらった際に, 自分なりの言葉でまとめて, 聞き返すことで, 学びを深め正しい情報を得ることができた
学習態度, 将来への考え 変化	<ul style="list-style-type: none"> ・タイの学生や先生から, 勉強に対する熱意を感じ, 自分の勉強に対する姿勢を見直さなければならぬと考えた。勉強に対する意識は確実に変わった ・日本の看護に関する知識が不足しており, タイに行ったことで今後取り組むべき課題が見つかった ・タイの文化として療養者を家族が支え, また地域で支えるケアシステムが整備されていることを学び, 今後保健師として働くうえでの参考となった ・日本の医療の制度や医療の現状, 看護のことをもっと学び, その上で他国のことを学んでいけたら良いと思った ・社会人になって再び留学できるように今後もさらに真剣に英語や看護学の勉学に継続して励みたいと思った ・看護者としての視野が広がり, 海外での看護活動を考えるようになった ・もっと国際的に物事をみていきたい
異文化交流	<ul style="list-style-type: none"> ・休日は民族博物館やビーチを訪れ, タイの歴史や仏教(仏陀誕生のエピソードなど)を知ることによって, 楽しく異文化に触れた ・国民性についても学べた ・異文化を知るのがとても楽しくなった
英語のスキルアップの 必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から積極的に英語を使うことで, 新しい英語のスキルを学ぶことができた ・まずは自分から話してみようということが大切だなと感じた ・もっと英語の学習をしようと思った

表4 本学で研修したPSU学生の学びと評価

項目	学びと評価
滞在場所の環境, 施設	<ul style="list-style-type: none"> ・大学内にある外来者用の宿泊施設に滞在した ・清潔で安全でありインターネットの接続の良さについても満足であった
滞在中の食生活に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア学生によるレストランやスーパーマーケットへの送迎や, 附属病院内にあるコンビニエンスストアの利用により問題はなかった
不便または問題	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害(台風の接近による影響)以外問題はなかった
宮崎大学の国際交流に 関するコメント, リクエスト	<ul style="list-style-type: none"> ・受入れの準備をきちんとしてくれていた ・学生, 教員, 病棟スタッフが親切で支援してくれた ・多くの自分にとって価値のある知識を得た。PSUの学生にとってこの交流事業は重要であると思う ・新しい友達を作り, 新しい考えを持ち, 新しい経験, 学習ができた ・日本人の学生および日本人の教師と意見を交換することができた ・病棟実習で多くの知見を得た ・機会があればもう一度宮崎大学を訪問したい ・留学を考えているPSUの学生に自分の経験を知らせて励起したい

もう一度宮崎大学を訪問したい」、「留学を考えているPSUの学生に自分の経験を知らせて励起したい」などがあり, PSUの学生は宮崎大学医学部看護学科とPSU看護学部との交流に価値を見いだしていた。回答結果から本学における研修についてのPSU学生の満足度は高いと考えられた。

3. 学生国際交流委員および学生ボランティアの活動と評価

学生交流委員およびボランティアの学生の活動については, 教員は学生の自主性を尊重し, 相談があった場合に対応している。学生は, 『会計係』, 『パンフレット係』, 『パーティー係』, 『ご飯係』, 『学外研修係』の5つの係に分かれて活動した。

表5 PSU学生受け入れに関する本学学生の活動と評価

係名	活動と評価
会計係	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の活動費は後援会から支給されパーティーや学外研修時の飲食費や交通費、入場券等に用いる ・前年までの費用の用途を参考にして予算を組み、公正に使用できるように計画していた ・係は2人で行ったが、学年が異なっていたため一人に負担がかかった
パンフレット係	<ul style="list-style-type: none"> ・日本や宮崎の文化や習慣などを紹介し、宮崎大学および看護学科についての紹介、地域連携・国際交流委員会の教員や国際交流委員・ボランティア学生の画像などを載せたリーフレットを作成した。 ・学年が異なっていたため集まっただけの作業が困難であった
パーティー係	<ul style="list-style-type: none"> ・Welcome Party およびFarewell Partyの会場準備や進行を担当した ・英語で司会ができるよう英文の下書きを作成しスムーズに進行できた ・会場で撮影した写真を「LINE®」のアルバム機能を使って、その都度UPするなど、活動が学生の負担とならないような工夫をした
ご飯係	<ul style="list-style-type: none"> ・レストランへの送迎や夕食の食品の買い物など、PSU学生の日々の食事に関する世話をを行った ・滞在中一度ホームパーティーを開催したが、準備等で負担が大きかった
学外研修係	<ul style="list-style-type: none"> ・バスで舂肥を訪れ日本の文化に触れることを目的として学外研修を企画した ・参加した学生から「PSUの学生は日本の昔の文化に興味を示していて、面白そうだった」、「日本での買い物や食べ物を喜んでもらい、異文化交流ができてよかった」などの意見があり、有意義な研修であった ・休日に鶴戸神宮・青島観光やショッピングモールでの買い物なども企画したが、本学の学生の参加が少ない場合にはパディサポートが不十分であった



活動と評価を表に示す(表5)。

昨年までは学生交流委員を設けていなかったために、ENP受講学生が主体となっており、義務感をもちながら受け入れをしていたところもあったが、本年は国際交流委員をはじめENP受講学生以外の学生が意欲的に、楽しみながら参加しており、学

生交流委員の設置は有効であった。またボランティアのメンバーは、パーティーや学外研修、ショッピングなどについて、ボランティアから一般学生への呼びかけが少なかったと振り返り、学部生全体での受け入れの必要性を考えていた。ボランティアの活動も一般学生に良い影響を与えたと考える。

・連携システムの構築に向けた課題

本学看護学科とPSU看護学部との交流のために必要な連携システム構築に向けた課題を整理した。

1. 学生国際交流委員および学生ボランティアの活動支援

PSUの学生の受け入れに際しては、学生交流委員および学生ボランティアの活動が大きな役割を果たしており、これらの活動が円滑に進むようなシステムが必要である。そのためには、学生委員の立場や活動内容を明文化し、当該年度の活動を文書として残して次の学年へ引き継いでいき、この活動が毎年継承されていくことが望まれる。さらに、1年次からボランティア活動への参加を促しPSUへの関心を高めることで、PSU看護学部の学生の受け入れ時の活動のみでなく、PSUでの実習を希望する学生も増えるのではないかと考える。

2. 看護学科内の協力体制

看護学科地域連携・国際交流委員会の活動は、学生や教員を巻き込む形で広がりつつあるが、資金面で活動が制約される場合があるため、今後は活動資金の獲得も課題となる。看護学科教員間では「学科全体でPSU学生を受け入れる」という意識が定着してきたが、さらに教員間の協力体制を整え、PSU学生滞在中の実習やイベント等にも多くの教員の関与を促す必要がある。

3. 医学部英語科との連携

医学部英語科はPSUでの総合実習に向け、2年次からの英語教育に力を入れており、準備の体制は整っているといえる。看護学科としてPSUからの研修生を受け入れ、教育的に関わるためには、教員の英語能力の向上は必須である。さらにstaff exchangeプログラムの活用の観点からも医学部英語科教員の支援を受けられるような働きかけが課題である。

4. 医学部学生支援課および清武国際交流室との連携

交流室は医学部の留学全般に携わっており、PSU以外の協定校との交流にも関わっている。本学看護学科とPSU看護学部との連携の基本形の構築が端緒につきつつある。これを他の協定校にも適用することで、国際交流を促進していくことが可能になると考える。

・おわりに

「世界を視野に地域から始めよう」という宮崎大学のスローガンのもと、本学看護学科とPSU看護学部との学部生、大学院生および教員の交流は今後ますます盛んになってくると考える。今回のまとめにより本学内の連携システムを構築するための課題が明らかになった。システムの確立のための活動を推進していきたい。

文献

長谷川珠代, 兵頭慶子, 大川百合子他 (2011): 看護学科におけるPSUとの国際学生間交流, 南九州看護研究誌, 9(1), 55-61